

Title	森田岡太郎
Sub Title	On Morita Okataro's journal of voyage to America
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.99(489)- 105(495)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

森田岡太郎

河北展生

幕末の御勘定組頭の一人に、森田岡太郎という人が居る。此の人物の履歴等については淺學の自分としては全く知る所がない。安政五年刊の『有司武鑑』に、勘定組頭の末席に彼の名が出ている。三十表三人扶持で、家は小日向はつとり坂、即ち音羽通の東側で老中をしていた關宿藩主久世大和守の下屋敷の近所である。

安政七年版で、裏に一月十九日購入と墨書のある『有司武鑑』をみると、勘定組頭の所に森田の名があるが、一躍百表となつている。更に萬延二年版の『有司武鑑』には、「布衣百表」と記されている。三十表三人扶持の組頭が大變な立身をしたものといはねばならない。何故このように急な立身をしたのかといえ、それは萬延元年正月、新見豊前守を正使とする遣米使節が派遣された

が、彼はそのとき勘定方として隨行渡米したからに他ならない。

何故十數名の勘定組頭の中から彼が選出されたのかは明らかでないが、派遣を命ぜられることになったのは、安政六年十月以前であったことだけは確實である。今日でこそ米國に行くことは何でもないのであるが、百年前の當時では、水盃を交して旅立つ所の騒ぎではない。太平洋という果しない大海を小さな氣帆船といつて、港の附近だけ石炭で走り他は風まかせといった舟で押渡るのであり、つい先頃開國したばかりで、外國の事情など全く見當もつきかねるといった工合であるから、生死の程は全く保證し難い大旅行の様に感じたに相違ない。

勘定方というものは、從來遠國に出張という場合でも、當時有難く名譽なものとされてきた將軍家よりの御羽織頂戴ということはなかつたのであるが、今度は行先が行先であるからというので、勘定奉行から「御勘定組頭の儀は、外國奉行御目付支配向とは勤柄も差別有之、

條約爲取替の節は勿論、諸般立會出席も可仕、至て晴の儀にも有之、拝領の羽織着用仕候へは、御役威相立候のみならず、當人において格別難有、別て氣勢も宣相勤るであらうからと申し立て、特別に羽織頂戴の許可されるようにと願ひ出て、ついにそれが許されることとなり、出張費として四四兩が下されるということも決したのである。安政六年十一月のことである。

ところで幕府は、同月森田に對し、三十表から百表に増封し、布衣に任じたのである。幕府の叙任の最も下は、從五位下で、六位の叙任はないのであるが、この六位に相當するのが布衣で、旗本等の區分では、布衣以上、御目見以上、御目見以下と三段に区分され、種々の點で嚴然と差別されるのである。森田の感激が如何ばかりであつたか、容易に想像される。

森田の地位が一段高くなつてみると、今迄の勘定組頭としての出張旅費の計算は訂正さる可きだとして、勘定奉行から改めて五割増の六七兩に訂正要求が出され、裁

可されているのである。

安政六年十二月朔日、正使新見豊前守外九名に對し、左の様な演達が行はれた。

金拾枚
時服三 羽織

新見豊前守

村垣淡路守

木村攝津守

小栗豊後守

森田岡太郎

勝麟太郎

成瀬善四郎

中井經藏

日高圭太郎

刑部鋏太郎

金三枚
時服三 羽織
同二枚
同三枚
同二枚
同二枚
同二枚
同
同

小栗豊後守に次いで、派遣人員中第五位の重職で、有名な勝麟太郎(海舟)より上位であり、劃然と勝との間に差をつけられている。

出帆直前の萬延元年正月九日になると、森田は、萬一上位四人に病氣其他の事で差支が生じたときは、使節の役を代行するよゝにとの命令を受けたのである。本人としては誠に光榮の事であつたらう。更に彼の嫡男が、春から兩御番へ番入を命ぜられたのである。兩御番とは、御小姓番、御書院番のことで、旗本中の上流の役で、これに番入を命ぜられたということは、親子が共に出仕することゝ、餘り例も多くはない。名譽というほかに、親掛りの嫡男が出仕することにより、御手當を受けることになるから、經濟的にも非常に恵まれたことになるのである。まさに重ね／＼の御恩恵というわけである。

森田は、咸臨丸で同じく渡米する木村攝津守とは少年時代からの友人であつたというが、この重なる幕府の恩恵に應えることを心に期し、大いに張切つて出發したのではないかと推測される。

遣米使一行は、最初アメリカ本土へ直航の豫定であつたが、途中米軍艦の都合で豫定を變更して、ハワイに寄

港し、サンフランシスコに至り、そこから更にパナマ廻りで東部に出て、舟でワシントンに赴いたのであるが、ハワイ寄港の際、日本近海に出航する捕鯨船があることを知り、これに箱館經由で江戸へ書翰を依頼し、サンフランシスコからも亦書信を送つたのである。この二度とも森田は日本に書翰を送っている。最初は家庭へ宛たものである。

荒天の爲航海が相當難航したが、まづ／＼無事に元氣にハワイに到着した事を述べ、ハワイの様子を報じ、土人の男は色黒く赤髪で眼が大きく、女は跣足で、江戸でいう色氣違のごとくであるとか、四時暑い土地で、物價が非常に高いと實例をあげて報告説明している。

サンフランシスコからの書翰は、同役に宛てたものでハワイに於ける諸物價を詳細に報じ、日本の物價が極めて安いとして「夷人の話にも、各國の内日本程諸色直段下直に候處無之、金銀迄御不釣合、日本の御爲には如何のもの哉と申聞候者有之、且夷人の内横濱にて求めし由

紫縮緬一疋一兩二三分の品、七ドルに夷人へ賣候を見留候、凡て江戸にて思ひ候とは案外の事に御座候」と記している。

また、ハリス等駐留のことで、當然問題となつたと思はれるものに、外國公館の規模、或はそれらとの接渉時に於ける取扱、待遇などがある。此の點に關係があるといふので、時にハワイ駐留の英米佛等の公館の様、それらの日本使節の待遇程度を詳細に觀察し、それが案外簡素であるとして、日本使節が訪問しても、「ビール、サンバイン一盃つゝ振舞候のみ、決して不相勤。萬事簡易にて浮費更に無之様子、當方へ尋問は、草花持參致し候位の事に有之：實地を不存候へは、案外の御損失、我に益なく彼に益なく、徒に浮費相立候事と愚案候事に御座候」と仲々の意見を書き送っている。頭から夷狄といつて、日本流を絶対だと信じているのとは異り、一通り外國の實際を見て、ことさらにそれを拒まず、我國の改む可き點、注意すべき點を觀察しているといふことから、

少くとも森田は頑迷な攘夷思想の持主でないことだけは確實である。また、最後に、「職掌の場合、御用意金成丈遺ひ込不相成様に心懸罷在候」と覺悟の程を語っている點からみても、誠に實直な性質の持主で、御國の爲にと、懸命の努力を掛つている誠實な人柄が充分汲み取れるのである。

萬延元年の遣米使節一行の人達の旅行日記のうち、公刊されたものとしては、上位の人達のものとしては、副使の村垣淡路守、咸臨丸で渡米した木村攝津守、勝麟太郎のものがある。即ちホーハッタン号で渡航した正使關係では村垣の日記があるのみである。

村垣の日記は、極めて詳細であり、且つ夷人の風習に對していささが反感を抱き、所謂神國意識が強い。したがって表現は奇抜であり、讀物としては誠に面白いが、誠實味ある觀察という點では、やや缺けるきらいがある。その意味で他の上位の人達の日記が期待されるのである。森田岡太郎には『亞行日誌』という旅行日記があ

り、それは未だ刊行されていないが、彼は前述の如き人物であるだけに、その日記は誠に注目に興するものといわなければならない。

森田の『亞行日誌』は、其一より其六に分けて出發より歸國までを記し、さらに、末尾には日表様式に『亞行日誌』の記事の要點を抽出した「亞行一覽」が付けられている。また別冊附録として「亞行船中並彼地一件一」、「同二」、「太平洋海サントウィツ島ノ内ワアフー島ホノルル港へ碇泊並同島國王ヨリ條約取結ノ儀申出候ニ付申上書並書翰類」、「合衆國草盛頓滯留中往復の書翰並歸程之儀及談判候書翰類一件」を収録しているのである。誠にたんねんな日記といわねばならない。

附録の書類、書翰は一先ず別として、『亞行日誌』を一讀してみても、先ず注意をひいたのは、村垣の如き奇抜な批評はないが、使節の乗船した舟の寸法、乗組員の主要人名表、及給料表を始めとし、ハワイ政廳並にハワイ駐在外交官人名表、米國州名表、英米度量衡比較表、米

國價幣分表析といった工合に、統計、一覽表的な記載が非常に多く記されているといった點である。それらの大部分は、恐らく米人が積極的に報じたのではなく、森田或は使節中の誰れかが求めたものであろう。それを實にたんねんに記録しているのである。

したがって全編に亘って、目にふれ耳にふれた數量的なものとの記載、例えば所用石炭量、米國側の接待費、物價といったものは勘定方という役職上とはいひ乍ら實に詳細に記録されている。然も、ハワイ、サンフランシスコ、パナマ、ワシントンと航行するに當って、行先の主要諸物價主として米價及び石炭價格を、豫め尋ねているのである。

もう一つ違った意味でその人となりを見わける傾向は、彼は調理法について、相當興味を抱いていたということである。ビスケット製造法、カステラ製法、小豚の丸煮法、豚の調理法、アイスクリームの製法といった工合である。木村攝津守は、歸國後ワッフルなる菓子を作つて、木村家の名物として人々に珍重されたというが、

或は森田も、西洋料理の一つぐらいは、歸國後實行して
いるのではあるまいかと思われる程である。

前にも觸れた様に、彼の誠實さと、攘夷的でない態度
から推して、出發前に、出来るだけの豫備知識を得るた
めに、種々勉強したものとと思われる。日誌中にも、『坤輿
圖式』、『職方外記』、或は『海國圖誌』といった書名が
散見する。それだけでなく、船中に於ても、猶勉強を行
ったもののように、閏三月十一日の條には、「地球説略一
卷、通辨名村五八郎と對讀」という記事が見える。

このような態度で米國に望んだ結果は、その見學の理
解は相當のものであった。例えば、恐らく當時の我國の
人々には、最も理解し難いものと思われる議會見學の様
子を、彼の日誌は、「高坐に耆人裁判役ト見エ小サキ槌ヲ
持テ、評決ノ爲机上ヲ撃ツ、中坐ノ者、書記イタス様
子、席地盡ク椅子ヲ設ケ、凡八九拾人腰カケ居、ナカニ
一人、椅子ヲ離レ高聲ニ建言ス、此時一坐肅然タリ、椅
子ニカカルモノノ内耆人、右ノ議論ヲ詰問ノ様子也」と

記している。何事か大聲でわめく様は、日本橋の魚市場
の如きであるという村垣の表現が、その理解程度を素直
に示しているとは云ひ難いが、とに角椅子を立てて論じ
て居る一人が、何かの意見を述べているのだ、それに反
對の意見の者も靜肅にその意見を聞いているのだといっ
た點を、一応理解したということ、他の所で、州選出
の議員の任期にふれ、彼等が「人民の入札」に依つて選
出されるのだという事を明記している點と併せて考えて
みると、一行中では、最もよくそう云つた米國の制度を
理解した一人であつたらうと思われる。

それだけに、彼は米國の税法、金利、豫算等々につい
ても、それぞれ質問しているのである。かくのごとく彼
の『亞行日誌』をみると、實に誠實で、有能な隨行員の
一人であつたといわなければなるまい。

遣米使一行は、通商條約批准の大任を無事果して、ニ
ューヨークより乗船、九月二十八日、無事品川沖に歸着
した。彼の日記も此處で筆を止めている。彼等は東廻り

で世界一週をしてきた來た譯で、歸朝してみて日附が一日ずれていることに氣が付いたはずであるが、そのことは何も記されていない。

萬延元年十二月一日、遣米使一行が、無事大任を果したことに對して、それぞれ幕府より褒賞が與えられた。森田も、老中列座の上、金七枚、時服三を拜領し、「亞墨利加國え爲御用被差遣候儀者、御國初以來初ての事に候處、遠境絶域の御用無滞相勤骨折候に付、出格の譯を以、年々爲御手當、御扶持方十人扶持被下之」と申し渡されたのである。亦々有難い事であつたに相違ない。

森田はその後も、勘定方組頭として暫く『有司武鑑』に名を止めているが、文久二年度のものには、勘定方から名を消している。安藤老中の坂下門外の變があり、長州藩の航海遠略策を奉じた公武合體乗出、これに代つて薩摩藩の乗出し、幕政改革と、ようやく幕末に於ける變動の波が、幕府内部にも大きな影響を與え、井伊内閣失脚後の大變動期であつたから、他の職に轉じたものと思

われる。その日誌からみても、誠實有能な幕吏であつたと思われるが、其後どうなつたのか、その消息が知りたいためである。

森田には『亞行日誌』の他に『航米雜詩』と題する漢詩集があり、木版で出版されている。また私の見た慶應義塾圖書館蔵の『亞行日誌』の他に森田家に『亞行日誌』と題する自筆の日誌があり、それが整理淨書されて、その淨書の寫が慶應義塾に收藏されているということ、および最初の『亞行日誌』は一、二を欠き、これを整理淨書したのも、その所在が不明であるということが最近判明した。誠においしいものである。

本年は日米修好百年の記念の年であるから、種々の計畫もあり、こうした資料類も複製されるようであるが、相当多く發見されると思はれる。